

## 小学校での外国語教育についての一考察

八重樫由美

### 1. はじめに

2002年より、「総合的学習の時間」の中で、「国際理解教育の一環としての外国語会話等が行われるときには、各学校の実態等に応じ、児童が外国語に触れたり、外国の生活や文化などに慣れ親しんだりするなど小学校段階にふさわしい体験的な学習活動を行う」ことが、教育課程審議会の答申により可能になった。

これまで、小学校における外国語教育の導入をふまえて、各県1校が研究開発校に指定され、それぞれのテーマの下に実践し、その成果を発表してきている。しかし、すべてがスムーズに進んでいるわけではなく、課題も多く、慎重論をとなえる人々も少なくはない。

そこで、本稿では、第二言語習得理論から早期外国語教育について考えるとともに、研究開発校の実践をふまえながら、小学校への英語の導入についての積極的な意見、慎重な意見を取り上げる。また、私自身が実際に行っている、小学校での「英語クラブ」活動と、小学2年生の「ゆとりの時間」を利用しての英語活動について触れ、小学校での外国語教育について考察する。

### 2. 第二言語習得理論

#### 2.1. 神経言語学的視点より

第二言語習得に関する研究は数多く存在するが、小学校へ外国語教育が導入されようとしていることから、日本でも、子どもの言語習得について注目が集まっている。ここで最初に、「臨界期」というものを取り上げて考えてみる。

第二言語習得に重要な影響を与える神経システムが、発達の過程で変化するという一方で、神経心理学的臨界期説というものがある。「臨界期」とは、「ある機能の学習が可能な期間」と一般に言われている。Penfield & Roberts (1959) は、9歳から12歳頃、あるいは思春期で終わる臨界期の後は、第一・第二言語にかかわらず、母語話者なみに言語を習得することが、困難かつ見込みがなくなると言っている。また、Lenneberg (1967) は、言語習得の臨界

期は、2歳から思春期までとし、思春期以後に言語習得が困難になるのは、この年齢までには、左脳への一側化が完了してしまうからだと言っている。しかし、思春期の定義は、言語学者により異なっており、さらに、思春期そのものに個人差があるということも考慮しなければならない。また、脳のメカニズムから見て、植村(1998)は、複数の言語については、臨界期内だと独立の言語中枢ができる説があることを述べ、子どものときは脳の運動場が広いので、異なった複数の言語を習得しやすいということを言っている。さらに、言語中枢というのは音声から入ることを考え、それを最大限に活かすことをすすめている。

Penfield や Lenneberg の説に対して、Krashen (1974)は、言語の左脳への専門化は5歳までには起こっている証拠を示している。さらに、Molfese & Molfese (1979) は、誕生時にはすでに専門化が起こっている可能性を示している。しかし、この「臨界期説」をめぐっては、はっきりとした証拠を提示することが難しく結論は出ていない。

様々な学説の中、実際に高年齢者と低年齢者の第二言語習得を見た場合、学習の初期段階においては、多くの面で、高年齢者の方が効率良く容易であるという結果が出ている。しかし、低年齢者が、どれだけの時間言語に触れているか、という時間的な面と音声面での有効性を考慮すると、早期に開始し継続することが第二言語習得に有効であると考えられる。

## 2.2. 右半球 (右脳) を意識した学習

これまで臨界期説を中心に考え、左脳への一側化や専門化について述べてきたが、ここでは、右半球 (右脳) に注目しその機能と早期外国語教育への有効性について触れる。

伊藤 (1994) は、かつては、言語能力は左脳が中心であり、右脳はその補助的な役割という考え方があったが、最近の脳の研究では、両方の脳がそれぞれの言語機能を持ち、相補関係にあるという仮説に注目している。このことに関連して、Obler (1993) は、右脳は母国語の習得だけではなく、第二言語の習得にも関わっていることを述べ、特に右脳は初期の段階で関わり、その後の段階で、左脳が関わってくると言っている。

児童の外国語習得という視点で、伊藤 (1994) は、右脳の特徴をつかんでの学習のあり方についていくつか述べている。一つ目として、右脳は全体的なイメージを捉えることができるので、絵や具体的な事物を使用している学習や遊び的な場面を重視したゲームが効果的である。また、右脳は感情にも関

わってくるので、児童の好奇心や興味、さらに冒険的な部分に触れるような教材を選択することも必要である。二つ目として、左脳が運用的な働きをするのに対し、右脳は、子どもに「沈黙の期間」が存在するように、理解する面での働きがある。従って、初期の段階では、良い発音を何度も何度も繰り返して聞かせるような多量のインプットが重要である。同時に、良い発音とともにイントネーションを詩や歌を使って教えることもよい。最後に、Asherによって提唱されたTPR (Total Physical Response) のように、行動を通しての学習が、右脳を効果的に使うということにも触れている。

### 3. 公立小学校への英語教育の導入について

#### 3.1. 慎重論から

英語教育関係者、あるいは一般の人々が、この英語教育の導入に慎重な態度をとる理由には次のようなものがある。

- ・日本語の習得ができあがった後での導入がいいのではないか
- ・学習開始年齢よりも重要なのは、学習時間であり、中学の入門期の時間を増やす方がいいのではないか
- ・中学校での充実した英語教育を優先するべきではないか
- ・中学以後の英語教育の改革とどのように連動するのか
- ・英語教育と国際理解教育との関係があいまいである
- ・「リスニング、スピーキング」がさらに重視され、「リーディング、ライティング」の重要性を低めることになる
- ・十分な条件整備なしに、その実現を事実上、当事者である小学校や地域に委ねる部分が多いのではないか  
( (ALT (Assistant Language Teacher) や JTE (Japanese Teacher of English) の問題、クラスサイズの問題 ) )
- ・現場の教員に過重な負担が求められる
- ・受験戦争の低年齢化につながらないか

上記のような問題点が挙げられているが、必ずしも、慎重派の人々が、すべてを否定的に捉えているわけではない。大切なことは、継続することであり、外国語としての英語が「楽しく」学べることであり、さらに、人格を形成する助けとなる内容を持ち得ているかということである。そして、「英語は楽しそうだ」という気持ちを持って中学に入っていければ、十分に成果を上げたことになると思う意見も多いのである。

### 3.2. 積極論から —研究開発校の挑戦—

これまで、多くの研究開発校が、3年間という期間を経て、それぞれ成果を発表しているが、その中でも、松川 (1997) は、岐阜県の生津小学校の研究について述べている。ここで大きく取り上げているのは、教員自身が得たこととしての「指導意識の改革」である。学級担任 (HRT) が、コミュニケーション体験を共有する人として行動し、教員自身が、楽しく活動することを通して学ぶことの重要性を持つようになったのである。また、もう一つの大きな特徴としては、英語を通して国際理解教育を行うことは難しいと考え、授業で行うのは英語学習と割り切って、国際理解教育の面は行事を通して行ったことである。英語の授業には、常に学級担任が参加し、また、子どもの興味のありかたをどう正確に捉えて題材化できるかという面でも、担任は子どもを把握する力を発揮した。

全体を通して、松川 (1997) は、初歩的なオーラル・コミュニケーションを楽しむ「適期」は、中学時代ではなく小学時代であると述べ、さらに、「楽しむこと」に主眼を置き、教科として扱う必要がないのではないかという意見に対して、「楽しく」学習することはいいが、あくまで指導法の問題であることを強調している。

次に、愛知県の西尾市立花ノ木小学校を例に挙げてみる。この小学校は、全国どこの小学校でもできる「英語学習」を追究し、次にあげる3項目を実施した。

- ・ 全学年週1時間の「英語科」を設定
- ・ 全クラス学級担任による指導
- ・ 指導形態に SAT (Skit Assistant Teacher) 制を導入

《 SAT 制とは、スキット場面やゲームの説明場面で、隣のクラスの先生と10分ほどの TT (Team-Teaching) を実施すること。》

将来的に、JTE や ALT が各小学校に配置されるかどうか分からない状況を見越して、学級担任である HRT でもできる英語学習のありかたや職員研修のありかたを追究したのが、大きな特徴である。実施した研修の中には、毎週、担任が児童役になり、イメージを持つための模擬授業やクラスルームイングリッシュの有効活用、さらに児童英語教育の専門家による研修がある。

最終的に、花ノ木小学校も、生津小学校と同様に、小学校の英語学習では、教えるという姿勢ではなく、教師も児童とともに楽しみながら学ぶという姿勢が大切であることを強調している。

これまで研究開発校に指定された多くの小学校では、特別措置としてALTやJTEを配置し、ユニークな活動を行ってきている。そのような状況の中、金沢市では、平成9年度より市内の全小学校を対象に、英語活動の導入を開始し、JTEやALTの配置に頼らず、地域の協力者を募りEAA(英語活動ボランティア協力員)として学校に登録するシステムをとり、学級担任とのチームティーチングを心掛けて取り組んでいる。また、市が独自に雇用している4人のEAC(英語活動指導員)も同時に活躍している。

慎重論の中で取り上げた多くの問題点に対して、それぞれの小学校が工夫を凝らし、前向きな姿勢で取り組むことで、すべての点ではないにしても解決策や見通しが見えてきたように思われる。

#### 4. 英語クラブの実践 —盛岡市立桜城小学校—

##### 4.1. クラブの概要と児童について

桜城小学校では、毎週水曜日に設定されている、4、5、6年生を対象とした必修クラブ活動の中に、英語を取り入れている。前・後期制を取っており、児童の希望をなるべく配慮し、また原則的には、前後期で異なるクラブを経験することとしている。

前期のクラブ活動は、英語の免許を持っている教員が担当し、児童の希望を取り入れながらゲームなどの活動を中心に行っていた。

今回、研究の機会をいただき、後期英語クラブ(全12回)を私が担当し、これまで7回実施してきた。週1時間(45分)の英語学習を毎回ビデオに記録し、さらに学習後に、私の発音を聞き、児童の個々の発音(単語5語・5文)を、1対1のインタビュー形式でテープに記録している。

クラブメンバーは、4年生1名、5年生6名、6年生9名の計16名(男子4名、女子12名)で構成され、学年にばらつきがみられる。6年生の希望が多かった理由としては、中学の英語を意識していることが挙げられている。

クラブを開始するにあたり、簡単なアンケートを行ったところ、英語学習経験の有無については、1名が2年間継続して民間の英会話学校に通っているほかは、数カ月の体験学習が3名、過去にクラブに所属していたのが3名、その他は全く初めての英語学習であった。また、英語で(英語を使って)どのようなことをしてみたいかという項目では、英会話や外国人の人達との交流を楽しみたいというものが圧倒的に多く、次いで海外文通や、本を読んだり

書いたり、あるいは作ってみたいというものがあった。文字に対する興味が見られるのは、やはり小学校高学年の発達段階の大きな特徴といえる。

#### 4.2. レッソンの特徴と留意点

文字を導入せずに、音声を中心に英語活動することを前提として開始したが、文字にも触れる機会を持つ意味で、毎回「英語クラブ通信」を作成し、よく目にする英語のフレーズを載せたり、また、外国の行事などについて、留学時代のエピソードを入れて、手書きの学級通信風にして発行した。

また、しっかりとしたカリキュラムは作成せずに、児童の様子や反応を見ながら、1時間の中に、だいたい2つくらいのトピックを取り上げて行った。レッスンプランを考える上で考慮したことは、次に挙げるような事柄である。

- ・ 4、5、6年の発達に合った言語材料はどのようなものがあるか
- ・ 1時間の流れのもっていきかた（話題の切り換え方）
- ・ 歌を選ぶとき、あるいは利用するときの留意点
- ・ 絵本の利用はどのようにしたら効果的か
- ・ 実物を提示するときの留意点
- ・ アウトプットはどこまで要求するか

さらに、レッスンを行う上で、一番大切にしたいことは、人を楽しませるためには、私自身がまず楽しんで動くということである。また、児童は教師の言動に敏感なので、ちょっとしたことにも気をつけるように心がけた。

#### 4.3. レッソンの内容の一部 ～効果と反省～

##### 《1回目》

- ・ あいさつの導入の後、自分の今日の状態を英語で表現する練習を行ったが、教師側が欲を出し過ぎ、いろいろな表現を持ち出したため、少し混乱してしまった。
- ・ Do you ～? の導入には、よく使用する動詞を取り上げ、まずは 10 questions をひたすら聞かせ、推測させ、簡単に確認した後で答え方を練習した。そして、パターンを知ったところで、実際に児童が英語で答える方へ持っていった。

##### 《2回目》

- ・ 1～20までの数を導入し、発音の難しい部分はポイントをおさえながら何度も練習した。

- ・数を使つてのゲーム ((マールでドン!))  
おはじきを使用し、グループに分かれ、自分の持ち分と仲間の持ち分のおはじきの合計を順番に推測していくゲームであり、How many ~ ? の意味をとらえることと、英語での数字の言い方が目標である。

#### 《3回目》

- ・『 Thanksgiving day 』 について
- ・数の導入に引き続き、単数、複数に挑戦。日本語での説明ではなく、児童の一人の肩をたたきながら “one child” と言い、次にとなりの児童の肩もたたきながら “two children”, さらに3人目に手を伸ばし “three children” と同じようなことを繰り返し、児童自身がルールを発見していく。同じようなことを、別の単語を使つて提示し、単数と複数の違いを感じ取っていった。
- ・歌の導入 (( Five Little Monkeys )) の前段階  
手作りの立体の絵などを利用し、数の復習とともに、6匹のサルに色を塗り、色の発音の導入に活用した。

#### 《4回目》

- ・クリスマス4週間前 『 Advent Calendar 』 について
- ・歌の導入の前に、「5匹の子ザルの物語」のおもしろさを教材を利用しながら提示したまでは良かったが、歌のレベルが少し高すぎ、選択のミスであった。歌は、やはり高学年でも短く覚え易いものを選択するべきであった。
- ・数を使つてのゲーム (( BINGO ! ))  
1~30の中から16個好きな数字を選び、マスの中に入れる。教師は、ただ数字を読み上げるのではなく、英語での質問形式にし、考えながら数字を探させる。これにより、質問の英語文に集中し、また反応も良く、楽しくかつ効果的であった。

(Ex.) How many members (are there) in one soccer team?

How many children in this room?

How old are you, YUMI?

When is your birthday, YUMI?

#### 《5回目》

- ・このカンの中には何が? (( What's in this can? ))  
大きなカン(キョロちゃんのカン)の中に色々な物を詰め込んで、教室に持ち込み、ヒントを与えながら児童に推測させる。正解が出たら、物

を提示しながら数回発音の練習をする。

(Ex.) 小さなぬいぐるみ等・・・ bear, frog, seal, dog, (hermit)crab, gold fish

《6回目》『 Christmas Party 』

- ・児童と、前もって相談していたゲームを実施した。
- ・果物と野菜でビンゴ! (( Fruits & Vegetables BINGO ))  
好きな物を16個選び、マスの中に日本語で入れる。教師は、英文の形で発表し、間をうまく使いながら進める。

(Ex.) This is very sweet and red. → strawberry

My favorite fruit is … watermelon.

Monkeys like … banana.

The king of fruits is … durian.

《7回目》1カ月半ぶりのクラブ活動

- ・How are you? のあいさつにも少しとまどいの様子があつたので、軽く復習をした。
- ・「もち」( Japanese rice cake ) を話題にして、Do you ~? の復習をかねて練習した。
- ・冬休みを話題にして、過去時制の Did you ~? を導入した。簡単な動詞を使って多くの児童に質問をした。その際、Do の質問には do で答え、Did の質問には did で答えるというポイントを説明した。
- ・アクセントについて、a white house と the White House を例に挙げて触れた。
- ・絵本を使って・・・(( Froggy Gets Dressed ))  
簡単な説明の後、物語に入ったが、聞こうとする態度が良く、絵と何度も繰り返される音をたよりに、内容を何となくつかんでいったようだ。ところどころで、確認をしながら進め、物語の後には、簡単な質問を英語で行った。

#### 4.4. テープの録音時の発見

毎回、活動後に、個々の発音をテープに記録している。

(例) 1回目

- 5 単語      ① science ② paper ③ door ④ shout ⑤ convenient  
5 文          ① Do you have a dog?    ② I'll be there.    ③ I have a cold.  
                 ④ What did you say?    ⑤ How can I help you?

- ・私 (教師) の口元を見ながら発音する児童が2~3名いて、何となくで



はあるが、きれいな音を出しているような気がする。

- ・少し、体を上下させて、自分でリズムをとりながら発音する児童がいる。
- ・継続して英語を学習している児童（小6）は、マイペースで、きれいにゆっくりと発音する。
- ・発音を聞き取りにくい児童の特徴としては、教師の発音が終わると同時に、間を置かず早口で言おうとする。
- ・文の中の音をひとつひとつ聞き取ろうとする児童が、文の全体の流れを失う傾向があるようだ。
- ・目をみながら話す児童とそうでない児童と半々である。
- ・毎回、自分の発音に対して、「今日は、ちょっと…」という表情を見せる児童もいて、自分の発音をかなり意識しているという良い傾向が見られる。

## 5. 小学2年生の英語体験学習 —盛岡市立仙北小学校—

～ゆとりの時間を利用して～

### 5.1. 「英語で遊ぼう！」

前章で取り上げた桜城小学校のクラブ活動と並行して、低学年における英語学習についての実践も行いたいと考えていたところ、仙北小学校の英語の免許を所持している2年生の学級担任（HRT）が、ゆとりの時間をくださり、全4回の内、これまで3回実施させていただいた。

31名の児童が在籍する明るく元気な学級であり、HRTとの打ち合わせの中で、児童の状況をよく把握しているので、アシスタントとして入ってもらうということで活動を始めた。その際、勉強としてではなく、遊びの雰囲気大切に英語に触れながら1時間を過ごすという共通理解を持った。

### 5.2. レッソンの内容の一部 ～効果と反省～

《1回目》

- ・HRTが、ウォーミングアップとして、ABC song と Ten Little Indians を教えていたので、歌で元気よく体も自由に動かしながら始めた。
- ・簡単なあいさつの練習
- ・クリスマスが近かったので、大きなクリスマスツリーのタペストリーを黒板に貼り、色の導入に使用した。ここでは、よく出でくる色を取り上げたが、さらに児童の方から出てきた好きな色も加えて発音練習を行っ

た。発音自体は、かなりきれいで、ほめながら続けたが、目立ちたいがために叫ぶ児童も数名みられた。

- ・『桜城小のクラブと同じ題材』－6匹のサルの立体の絵を用いて、児童の興味をひきながら、「5匹の子ザルの話」をし、色と数の練習もした。
- ・『桜城小のクラブと同じ題材』－このカンの中には何が？((What's in this can?)) 日本語と少しの英語でヒントを与え、児童全員で推測していく。次から次へと、児童が発表し、かなり興味をひく活動であった。中身を色々と工夫すれば、何パターンでも活動が出来そうである。ただし、注意しなければならないことは、物(ぬいぐるみ等)を提示し発音や説明を終えたらしまうことである。これは、低学年は特に、興味の対象が英語ではなくその物の方に行く傾向が強いからである。
- ・反省として、HRT から、体を動かす活動がもう少しあれば、他の部分で落ち着いて話が聞けるであろう、というアドバイスをいただいた。

#### 《2回目》

- ・TPR (Total Physical Response)での導入  
(Ex.) Stand up. Sit down. Turn and jump.  
Touch your (head, shoulders, knees, toes, mouth, ears, nose, and eyes.)
- ・TPR の導入を受けて、Simon says ～. に挑戦した。
- ・Colors Basket (フルーツバスケットの色編)  
5色を使い、生き生きと体を動かし、全員が大移動しながら楽しんでいった。
- ・「5匹の子ザルの歌」に挑戦してみた。少し長いのだが、CDに合わせて一生懸命歌っている児童もみられた。子ザルの話はおもしろいのだが、歌とは別扱いにした方がよかった。

#### 《3回目》1カ月半ぶりの英語活動

- ・Ten Little Indians の歌で元気よく導入。ひさしぶりの来校に、多くの児童が英語であいさつをしてくれた。
- ・色に反応したことを取り上げ、色の言い方を一通り復習した。
- ・かつて登場した“frog”を取り出し、カエルについて触れ、物語の簡単な説明をした。

『桜城小のクラブと同じ題材』－絵本 ((Froggy Gets Dressed))

大きな特徴としては、何度も繰り返し出てくる音(擬態語)に反応し、一緒に音を出して楽しみ、またカエルの動作にも注目させることで、ともに体を動かしながら聞いていた。低学年の場合は、絵本を聞くというよ

りも体験するという感じを受ける。

- ・物語の中に出てきた衣服を実際に準備し、mittens, gloves, scarf, cap, socks などの発音練習をした。

## 6. まとめ

### 6.1. 小学校での外国語教育のありかた

これまで、小学校への英語教育導入に対しての慎重な意見、また、研究開発校の様々な挑戦をみてきた。慎重な態度をとる意見の一つに、母国語教育に良い影響を与えないのではないかとというものがあつたが、果たしてそうであろうか。現在、巷では、マスメディアの影響もかなりあると思われるが、乱れた日本語が飛び交っているような状況にある。従って、小学校に英語を導入したらどうなるかという以前の問題であつて、むしろ、小学校の段階で英語という他の言語に触れることで、改めて日本語・国語の意味を学ぶことになるのではないかと考える。さらに、日本語の使い方をもっと意識する良いきっかけになるのではないだろうか。

しかし、現実問題として、一般の小学校が、研究開発校のように大きな取り組みを行うことは極めて難しい。そこで、出来る範囲で小さなことから始め、徐々にフィールドを広げていくことが良いと思われる。具体的には、新しい教材を作ったり、あるいは様々な言語材料を選んだりすることに時間を費やすのではなく、それぞれの学年に合ったレベルで構成されている他の教科の内容を教材に盛り込んで、それに英語を利用する形であれば、負担という部分で少し軽くなり、実践面における研修の方に時間をかけられるのではないかと考える。そして、軌道に乗ったところで、発展的な取り組みをすると、それぞれ小学校独自の特徴が出てきておもしろいのではないかと思う。

「総合的な学習の時間」という視点から、小学校に外国語教育が導入される可能性を考えるのであるから、やはり目的は、「楽しさ」を味わうことであり、そして、コミュニケーションを図ろうとする意欲を身につけることである。このように考えると、中学・高校との連携に関しては、小学校の様子を知り、互いにある程度の情報を交換することは大切であると思うが、根本的には扱いが別であると割り切って学習を進めることが望ましいのではないかとと思われる。

## 6.2. 2つの小学校の実践を通して ～途中経過から～

4、5において、それぞれの小学校での活動内容と効果・反省を述べたが、ここでは、2つの小学校での様子を比較してみたいと思う。

桜城小は、特に高学年を中心としたクラブとしての希望参加であり、モチベーション面では、最初から高いといえる。ビデオとテープでの記録目的については、前もって話しているのので、被験者としての意識が少しあるようである。

一方、仙北小の方は、低学年で、学級全員参加の形をとり、個々の発音をカセットテープにはとらず、ビデオのみの記録である。最初は、ビデオを意識することもあったが、活動が始まってしまうとほとんど気にならないようである。モチベーションという面では、ばらつきがあるのではないかと考えていたが、新しいことに触れられるということで、毎回、予想以上にわくわくしてる姿が見られた。時々、活動中に楽しんでいるのかどうか不安な児童が目につき、HRTに尋ねてみたが、家では、その日の英語について楽しく家族の人と話をしているのだと聞き、児童によって自己表現の仕方が様々であることを今更ながら感じた。

高学年は、活動の導入においては、少しためらったり恥ずかしがったりすることもあるが、いったん軌道に乗ると、英語を使っのゲームを楽しむと同時に落ちついて取り組むことができる。また、音への興味とともに、やはり活字にも関心を示す傾向が強いので、書く作業なしでの、見ること（提示すること）においての文字の導入も効果的であると思われる。よく話題に上る「フォニックス」に関しては、これは指導者自身の力量によるところが大きいと思うので、私自身は利用したことがないが、児童の発達段階によっては、しっかりとした指導のもとであれば、公立小学校での導入も考えられるかもしれない。

低学年に関しては、実際には、「総合的学習の時間」の実施に関わっていないのだが、意欲の面と物事がすんなりと入っていく浸透性を考えると、英語学習、すなわち「英語楽習」の効果がかなりあると思われる。しかし、45分という1時間単位での学習では集中力がなかなかたないのので、話題の切り換えも考慮しながら、1回15分程度で1週間に数回の設定が理想的であると考えられる。

同じ教材（カエルの絵本）を、高学年と低学年に使用してみたところ、おもしろい違いが見られ、一つの題材の幅の広さを感じた。高学年においては、ストーリーの流れに注目し、音と絵と、そして教師のヒントとなる動きで、

推測しながらついてくるという状況であった。一方、低学年は、前にも触れたように、主人公の動作に関わる音（擬態語）に反応し、実際に自分も動き、体験しながらストーリーの中に入っていくという感じであった。絵本の利用は、読後の活動にも有効で、どの段階の年齢でも工夫次第で活用できるという大きなメリットがあることを再確認した。

このように見えてくると、小学校の6年間は、発達心理学者の Piaget が研究したように様々な段階に分かれているのがよく分かる。それぞれの発達段階に合った教材を利用することの重要性が、小学校の外国語教育の鍵になっているということに気づかされる。さらに、国際理解の基本的姿勢にもなりうるような、どの児童も持っている「好奇心」を引き出すことに、小学校への外国語教育の導入がうまく関わっていけるような可能性を、まだ研究途中の段階ではあるが、前向きに持つことができた。

#### 参考文献

- 伊藤克敏 (1990) 『こどものことば—習得と創造』 東京：勁草書房
- 伊藤克敏 (1994) “Neurolinguistic Basis for Child Nonprimary Language Acquisition” JASTEC JOURNAL NO.13
- 影浦攻・小学校英語セミナー委員会編 (1998) 『小学校英語セミナー No.1』 東京：明治図書
- 久畑百合 (1997) 「小学校の英語教育をどう進めるか」『教職研修』 8月増刊号 東京：教育開発研究所 pp.147-150.
- 小池生夫 (監修) S L A 研究会 (編) (1994) 「年齢と第二言語習得」 「早期英語教育」『第二言語習得研究に基づく最新の英語教育』 東京：大修館書店 pp.147-166. 167-178.
- 白畑知彦 (1998) 「外国語学習の臨界期をめぐる議論」『英語教育』 6月号 東京：大修館書店 pp.8-10.
- 樋口忠彦ほか編 (1997) 「小学校における外国語教育の進め方」『小学校からの外国語教育』 東京：研究社出版 pp. 94-246.
- 松川禮子 (1997) 『小学校に英語がやってきた!』 東京：アプリコット
- レスリー・M. ビービ編 (1998) 「神経言語学視点」『第二言語習得の研究』 東京：大修館書店 pp.87-118.

- Krashen, S.D. (1974), "The critical period for language acquisition and its possible bases" Annals of the New York Academy of Sciences. (pp.211-224.)
- Lenneberg, E. (1967), The Biological Foundations of Language. New York: John Wiley.
- Molfese, D.L. & Molfese, V.J. (1979), "Hemisphere and stimulus differences as reflected in the cortical responses of newborn infants to speech stimuli" Developmental Psychology. (pp.15, 505-511.)
- Oblor, L.K. (1993), "Neurolinguistic Aspects of Second Language Development and Attrition" In K. Hytenstam & Viberg, A. (eds.) op.cit..
- Penfield, W. & Roberts, L. (1959), Speech and Brain Mechanisms. New Jersey: Princeton University Press. (上村忠雄、前田利男 (訳) (1965) 『言語と大脳』東京：誠信書房)
- Piaget, J. (1955), The Construction of Reality in the Child. New York: Basic Books.
- Kiddy CAT 編集部 (1998) 『児童英語教師BOOK』東京：アルク
- 「特集：英語教育界『連携』のために」(1999) 『現代英語教育』1月号 東京：研究社出版 pp.5-33.
- 「特1集：早期英語教育を考える」(1994) 『新英語教育』7月号 東京：三友社出版 pp.7-18.
- 「特集：小学校で英語教育!？」(1996) 『新英語教育』9月号 東京：三友社出版 pp.7-26.

(岩手大学教育学部英語教育専修)

資料1

ENGLISH CLUB

# 英語が通信

NO. 1

この通信の名前です。  
「ドリマー」とは、「夢を見る人」という意味。  
人間、夜に夢を見る生き物... ね。  
どんな小さなものでも、大切にしよう!!

Drummer  
♡♡ Dreamer ♡♡

## 【こんな人間になろう!!】

- 英語の音を楽しもう。  
《日本語とはちがう、音の流氷に耳をたたく感じがする》
- はげしかかばらずに、とどん口を重かたう。  
《何事も、新は、テンション!!》
- 英語は、体全体で表現するものだ...と  
《顔の表情も、大切なコミュニケーション手段。》 感じてみよう。
- 新しいものに、うんとう興味ももち。  
《好奇心も、やみくもにぶつかるのは、おいてない。》
- いつのまにか、英語と世界が繋がった。  
《新しい世界が見えてくる...》と感動しよう。

Nice to meet you.

みなさん、こんにちは!!  
これから数ヶ月間 いっしょに英語を  
楽しんでと鬼っている、八重塾 由美子。  
日本語は、私たちにとって、とても大切な  
言葉。英語は、新しい世界を拓いたり、  
他国の人との出会いに役立つ  
言葉。どちらの言葉も  
自分のものにして、楽しく  
生きていきたい。



Yumi

現職も英語の  
修業中では





